

## はじめに

高橋秀寿

西川長夫氏は「最後の論集」となった『植民地主義の時代を生きて』のあとがきのなかで、大学という機関に身を置きつづけた半生を振り返りながら、次のように書いています。

「反アカデミズム、反大学を唱えながら、結局は大学や大学の友人たちの世話になり、大学の周辺でしか生きることができなかった。忸怩たるものがある。」(581頁)

大学時代に私はかなりナイーブなマルクス批判をよく耳にしました。マルクスは肉体労働を行う労働者階級などには属しておらず、むしろブルジョア階級だった。だからマルクスにブルジョア階級を批判する資格はない、というものです。実際のところマルクスはかなりの貧困生活を送っていたようですが、職業人として大学に身を置くことはありませんでした。一方、国民国家の激しい批判者であった西川氏は、そのイデオロギー装置の中核を担っていた大学という制度を職業の場とし、そこに設立された研究所の所長としても、この制度を支えてきました。反大学を唱えながら、その制度から離れることがなかったという「矛盾」とも思える状況に対して、西川氏が平然と達観した態度をとることができるような研究者ではなかったことに、彼を知る誰もが首肯するでしょう。「忸怩たるもの」とはまさにそれを示す表現です。彼は国民国家のもっとも激しい批判者であると同時に、というよりももっとも激しい批判者であるゆえに、この「矛盾」を深く自覚していた研究者だったのではないのでしょうか。

「国際言語文化研究所」の所長を務めていた西川氏は、文学部に就職したばかりの私を専任研究員としてその研究所のスタッフに迎え入れてくれました。それから数年間、私は少なくとも週に一度は西川氏と顔を合わせることになりました。この機会のおかげで、彼と研究上の交流ができたこと——もちろんそれは私の一方的なものでしたが——はもとより、彼と研究所を通して多くの刺激的な研究者と知り合えたことは、いまにして思えばまさに僥倖ともいうべきものでした。しかしまた、制度としての大学との西川氏のかかわりもこの機会に垣間見ることもなりました。ある時、研究所が外部資金を調達するために、「大物右翼」として知られる人物の名前の付いた研究助成への申請を研究所事務職員が提案し、所長を代表者に据えてその申請書を私が記入することになりました。私は西川氏に、この研究助成の代表者として国民国家批判者である西川氏の名前を記入することは、結果としてその国民国家論に汚名を着せることになるのではないかという懸念を伝えましたが、彼はうっすら笑みを浮かべながら「文科省も、右翼も、違いはないですよ」と軽く受け流したのです。そのころ私は科研費に申請書を提出して、資金を受け取っていたのですが、西川氏の笑みには、そのことには疑義を明言しない私に対する非難が込められていたのかもしれない。このように、制度に対する職業人としての責任感を右手に、その制度を内部から切り崩そうとする研究者としての良心を左手に抱えた弥次郎兵

衛が、ときどきゆらゆら揺れながらも、バランスをとっている姿を何度か目にしました。

大学は遅かれ早かれ解体していくでしょう。たとえ「大学」という名のついた制度が存続していくとしても、その中味は今日の大学とはまったく異なったものになるに違いありません。その変容がいま現在、猛スピードで進行していることは誰の目にも明らかです。そして、国民国家の制度である大学の変容が国民国家自体の変容であることはいまでもありません。だからこそ、国民国家の装置である大学に身を置いているという理由だけで、国民国家批判の研究者としての資質を問題にすることは、先のマルクス批判と同様に生産的ではないでしょう。むしろ、大学と同時に、国民国家の変容をいかなるものにしていくのか、その変容過程に自らがどのように関わっていくのかという問題がまず議論されなければならないはずです。もちろん、時代の最先端を行くものとして鼻高々にその変容を推し進めるならば、ふたたび国民国家に、あるいはグローバルな資本主義に奉仕する制度として大学を再生産することになりかねません。「忸怩たるもの」、すなわち恥じ入る気持ちこそ、大学の内部にいて大学の変容を推し進める者のもっとも真摯な態度であるように思えます。

西川長夫という研究者は大学とどう向き合ったのか、国民国家に対する激しい批判者がその装置である大学で教育と研究を行うことは何を意味するのか——これが連続講座『西川長夫——業績とその批判的検討』の第二回目のテーマでした。翻訳の共同作業を通して、あるいは大学院生として西川氏と個人的にも深くかかわった一人の報告者と二人のコメンテーターがこのテーマに挑んでくれました。残念ながら、コメンテーターの一人、橋口昌治氏は事情があって本誌への寄稿を断念されました。しかし西川氏が、書かれたものとしての研究によって国民国家とのかかわり方の問題を私たち提起しただけではなく、社会・政治的実践としての研究という行為にも重大な問題を投げかけていたということが、第二回目の連続講座とここに掲載された寄稿論文を通して明らかになったと思います。私もこの問題を投げかけられた研究者の一人です。そのため、西川長夫という「怪物」はこれからも亡霊のように私の背後で笑みを浮かべつづけていくような気がしてなりません。